

# 内藤湖南の敦煌學

高 田 時 雄\*

## 一、敦煌學成立への寄與

明治の末年、敦煌遺書発見の報が日本にもたらされるや、その學術的價値をいち早く認識し、狩野直喜等京都大學の同僚と相圖って「敦煌學」の建設に邁進した第一人者は、他ならぬ内藤湖南である。湖南は明治四十年十月、京都の文科大学に講師として招聘され、操觚界から轉じて本格的に學術の世界に足を踏み入れたばかりであった。二年後の明治四十二年九月に湖南は教授に昇進するが、それ以後數年はまさしく「トンコイズム」の熱に浮かされた時期であったといえよう<sup>1)</sup>。その頃京都では新しい中國學への胎動がはじまっており、研究對象として敦煌発見の文献や文書はまさにこの新しい中國學を象徴する恰好の材料であった。このあたりの事情は湖南自身が上記「トンコイズム」で要領よく概括しているほか、石濱純太郎や神田喜一郎が身近に見聞した事實をふまえて、敦煌遺書発見の経緯と敦煌學成立の事情につき詳しく語った講演記録があつて、ほとんど付け加えることがない<sup>2)</sup>。しかし京大赴任後の一時期、湖南がいかに敦煌寫本に熱心であったかを確認するため、煩を厭わずその活動の概略を今一度辿っておくこととしたい。

敦煌莫高窟の一洞から古寫本を中心とする大量の遺物が発見されたのは西暦1900年のことである。しかしこの驚くべき敦煌遺書発見のニュースが廣く學界に伝えられたのは、1909年（明治四十二年）の秋、フランスのポール・ペリオがシベリヤ經由での歸國の途次、所獲寫本の優品を北京の學者たちに見せたことがきっかけであった。北京でその場に居合わせた舊知の羅振

---

\* 京都大學人文科學研究所教授

- 1) 「トンコイズム」は湖南自身が草創期の敦煌學を語る談話記録において用いた表現。同名の談話記録は大正十五年七月発行の雑誌『新生』に掲載された。『内藤湖南全集』第6巻（1972、東京、筑摩書房）238-239頁に再録。
- 2) 石濱純太郎「敦煌石室の遺書」（大正十四年八月五日～八日の大阪懷徳堂における講演）、同年十二月に單行本として出版。のち石濱純太郎『東洋學の話』（大阪、創元社、昭和18年）に収録、その1-105頁。神田喜一郎の「敦煌學五十年」は昭和27年11月16日、龍谷大學で行われた大藏會の記念講演で、『龍谷史壇』第38號（昭和28年12月）、同第41號（昭和31年12月）に分載された。のち神田喜一郎『敦煌學五十年』（東京、二玄社、1960年）1-36頁に再録。同書の改訂版（筑摩叢書169）（東京、筑摩書房、1970年）および『神田喜一郎全集』第9巻（京都、同朋舎、1984年）にも収録されている。また初期敦煌學の諸側面を扱った『草創期の敦煌學』（高田時雄編、東京、知泉書館、2002年）も参照されたい。

玉から通報があり、さらに東京の古書肆文求堂主人田中慶太郎を經由して送られてきたペリオ所獲寫本の寫眞を手にした湖南は、『朝日新聞』紙上に「敦煌石室の發見物」書いて紹介し<sup>3)</sup>、早速それらを岡崎の府立圖書館において展覧に付すとともに、講演會を開催した。さらにペリオが所獲寫本を見せたことが北京の學者たちをいたく刺激したことが機縁となって、翌1910年(明治四十三年)には清朝政府が敦煌殘存の敦煌遺書を悉皆北京に運ばせるということになった。それを見に來てはどうかという羅振玉の勧誘を受け、五名の京都文科大學の教官からなる調査團が組織されることになった。五名とは湖南のほか狩野直喜、小川琢治の二教授、それに富岡謙藏、濱田耕作の二講師という顔ぶれであり、同年の九月から十月にかけて實施された<sup>4)</sup>。これは創立間もない文科大學としては大きな出來事であったが、少なくとも湖南にとって主目的であった敦煌遺書に關していえば、期待したほどの成果を得ることはできなかった<sup>5)</sup>。ほとんどが佛典であったからである。一行は約800卷の經卷を閲覽し、そのうちの700卷ほどは目録を作成、相當數の寫眞を持ち歸った。これらは同僚の佛教學者松本文三郎の研究に供され、早速その概要が報告された<sup>6)</sup>。歸國後、年が改まった明治四十五年二月には展覽會及び報告講演會が催され、『朝日新聞』の記事が宣傳効果を發揮して大きな評判となったらしい。同じ頃、大谷探險隊の發掘品も京都に到着し、探險隊員の橋瑞超に大學で講演してもらったり、大谷光瑞の依頼によって探險隊所獲品の調査研究に攜わったりもした。これには上記清國派遣員以外に、大學からは桑原隲藏、松本文三郎、榊亮三郎、羽田亨等が参加し、學外からは當時國華社の主幹であった瀧精一も加わっていた<sup>7)</sup>。この時期の京都の學界は、敦煌遺書や西域發見遺物を中心に展開していたと言っても過言ではない。明治四十四年(1911)十一月二十七日、革命の難を避けて羅振玉・王國維が日本にやって來たことも、湖南等京都の敦煌學派を一層刺激したことは勿論である。湖南の言うところによれば、この熱狂状態はだいたい大谷探險隊將來品の尤品を収めた『西域考古圖譜』<sup>8)</sup>が出版されるころまで續いたらしい<sup>9)</sup>。

敦煌學の熱狂の最中であって獅子奮迅の活躍をした湖南であったが、しかし實は彼には敦煌遺書を取り上げた研究はこれといって何もない。この時期ばかりではなく、生涯のうちで正面

3) 明治42年(1909)11月12日『朝日新聞』(大阪・東京)。

4) 出發日については諸説あるが、八月末には乗船、神戸を發つたらしい。拙文「明治四十三年京都文科大學清國派遣員北京訪書始末」『敦煌吐魯番研究』第七卷(2004)13-27頁を参照。また歸國は10月中旬だが、小川と濱田は別行動をとったためやや遅れて10月下旬に歸國した。

5) 『大阪朝日新聞』明治44年2月5日日曜附録に掲載された「京都文科大學清國派遣教授學術視察報告報告展覽會號」に見える。この一文はのちに「清國派遣教授學術視察報告」と題して『目録書譚』(東京、弘文堂書房、昭和23年)に收められた。『全集』では第12卷に收める。

6) 松本文三郎「燉煌石室古寫經の研究」『藝文』第二年第五號、第六號(明治44年)、のち同氏『佛典の研究』(東京、丙午出版社、大正3年)に収録。

7) 内藤「トンコイズム」、また神田「敦煌學五十年」二玄社版22頁。

8) 香川默識編、上下二卷、東京、國華社、大正4年6月刊。

9) 内藤「トンコイズム」を参照。

切って敦煌寫本を扱った論考はまったく見られないのである。これは奇妙と言えば奇妙である。同じ敦煌黨を自稱<sup>10)</sup>して憚らなかった狩野直喜は、大正元年の秋から翌年の春までヨーロッパで親しく敦煌寫本を見、歸國後矢継ぎ早に「唐鈔古本尚書釋文考」「支那俗文學史研究の材料」を發表したのと比較すれば、湖南の敦煌遺書に對する際だった寡黙さは非常に意外と言うほかない。では湖南は敦煌熱を煽るだけ煽っておいて、後は知らぬ顔を決め込んでいたのであろうか。おそらくそうではあるまい。狩野にやや遅れて、後輩の羽田亨も大正八年（1919）からヨーロッパに滞在した。それらを横目に見ながら、様々な事情でヨーロッパ行きの方が得られないことには些かの焦りを覚えつつも、湖南は相変わらず敦煌遺書に對して強い興味を持ち續けていたと思われる。積年の願望を果たすべく、湖南が弟子を引き連れてヨーロッパ各國を巡るのは、ようやく目の前に停年退官を控えた大正十三年（1924）、敦煌熱の狂騒から十五年ほどの時間が経過している。その間、英佛の敦煌寫本を實際に見てきた人々も少なくはなく、日本や中國には目録がある程度備わり、寫眞もかなり將來されていた。そういったこれまでの成果を充分に把握した上で、湖南は周到な準備を行った。遅ればせながら敦煌寫本へ情熱が再燃する。

## 二、大正十三年の航歐と董康との連携

大正十三年から翌十四年初にかけての湖南の英佛における敦煌寫本調査については別に觸れたことがあるので<sup>11)</sup>、重複する嫌いはあるが、その旅程と成果につき極くかい摘んで述べておこう<sup>12)</sup>。湖南のヨーロッパ渡航には、弟子の石濱純太郎、女婿の鴛淵一、長男乾吉が同行した。出發は七月六日、船は日本郵船の伏見丸である。上海、香港、シンガポール、コロombo、スエズ等を経て、八月十七日にはマルセイユに到着。翌日パリに移動し、先ずギメやチュルヌスキなどの博物館、國立圖書館を見學したのち、二十五日にロンドンに移った。ロンドンでは一月あまりが敦煌寫本の閲覧に充てられた。當時大英博物館で敦煌寫本の管理に当たっていたジャイルズ（Lionel Giles）は必ずしも協力的とはいえず、百數十巻を閲覧し得ただけで、充分に満足に行く調査はできなかった。一行はその後九月二十九日にパリに戻り、パリからベルリン、ライプチヒ、ミュンヘン、ウィーン、チューリッヒなどを駆け足で見て回ったあと、再びパリにとって返し、いよいよフランス所藏の敦煌寫本の調査を本格的に開始した。イギリスの

10) 狩野「海外通信」『藝文』第四年第一號（1912）に、ペテルブルグでゴズロフのカラホト發掘品を見たときの感想として「我輩敦煌黨には涎の流るるもの」という表現が見える。

11) 拙文「敦煌寫本を求めて——日本人學者のヨーロッパ訪書行」『佛教藝術』二七一號（2003）21-32頁。

12) 湖南のヨーロッパ行については主として以下の材料による。①「歐州にて見たる東洋學資料」『目録書譚』（東京・京都、弘文堂、昭和23年）、290-306頁（もと『新生』大正15年5月號に掲載）；②「航歐日記」『全集』第6巻474-506頁所収；③『全集』第14巻所収の書簡。

場合とは異なり、パリでは終始ペリオの協力を仰ぐことができ、日本通のエリセーエフ(Serge Elisseeff)が親身になって援助してくれたため<sup>13)</sup>、萬事順調に運んだ。ビブリオテーク・ナショナル所蔵分とペリオの私邸に置かれたものをあわせ合計六七〇部の閲覧を終え、寫眞撮影も希望通りに許可された。かくして調査は上々の結果で、一行は十二月十四日にパリを發ち、ベルン、ミラノ、フィレンツェを経てローマに入った。ローマでは古蹟の探訪に數日を費やし、その後ジェノア、ニースを經由、二十五日にマルセユ港に到着した。ついで二十八日には日本郵船の香取丸に搭乗、船上の人となった。神戸着は明けて大正十四年の二月三日であった。

湖南は當初、歐州での調査を終えてのち、アメリカ經由で歸國する豫定を立てていたらしい。しかし敦煌寫本の寫眞代が豫想外に膨らみ、その計畫を斷念せざるを得なかった。大正十三年(1924)十月十五日、黒板勝美に宛てライプチヒで認められた書信に、「倫巴(ロンドン・パリ―筆者)にて寫眞に莫大の金額を要すべき見込故、米國廻りを廢し全力を此方に注ぎ可申候」と書かれている<sup>14)</sup>。この時點では湖南はまだパリの調査を開始していないが、ロンドンでの寫眞代にすでに七十ポンドを費やしていた<sup>15)</sup>。パリでの調査次第によっては更に寫眞の費用が高むであろう。この決斷は致し方ないものであった。實際にパリに来てみると、めぼしいものが幾らも出現し、是非とも寫眞に撮らねばならないものは増える一方であった。これは湖南がもともと目標を佛典以外というふう決めていたことも関係している。ロンドンの敦煌寫本は佛典の比率が高く、典籍や世俗文書の數は比較的少ない。その上、ロンドンの佛典寫本はすでに矢吹慶輝が網羅的な研究を行っていた。パリの蒐集はペリオが藏經洞内で自身が逐一選擇して持ち歸っただけあって、佛典以外の寫本の比率がきわめて高く、學術的な價値の高いものが多かった。當然ながら湖南はそれらの材料に強い關心を示したであろう。十二月三日といえは、パリでの調査をほぼ終えた時點であるが、同日付の鈴木虎雄宛書簡でも、「歐州滞在期日も已に切迫致し、ビブリオテーク・ナショナルの敦煌遺書も三百種ばかり閲覧、寫眞・ロトグラフの數も五十餘種に上るべく、其他手寫せしものも數十種あり、文學上の新しきものも有之、いづれ御參考になるもの可有之存候。その爲費用も隨分かさみ亞米利加を見棄て候」とあり、金額には觸れられていないが、相應に寫眞代が高んだであろうことが推測できる<sup>16)</sup>。なにも敦煌寫本に限ったことではないが、重要と思われる資料の入手にはほとんど異常なほどの執念を傾ける湖南の本領は、ここでも遺憾なく發揮された。滞歐中に撮影した枚數は、寫眞とロ

13) エリセーエフの熱心な援助には、おそらく當時大阪外國語學校のロシア語教師で、京都大學でもロシア語を教えていたニコライ・ネフスキー(Nikolai Nevsky)の紹介があったに違いない。一行のうち石濱純太郎はネフスキーの親友であった。

14) 『全集』第14巻、560頁。

15) 『全集』第6巻「航歐日記」485頁。ちなみに70ポンドは當時の爲替レートで邦貨約896圓に相當する。大正15年の公務員の初任給が月額75圓、この金額はほぼその一年分の俸給に近く、寫眞撮影が如何に高かったかが分かる。『續・値段の明治大正昭和風俗史』(朝日新聞社、昭和56年)、159頁を参照。

16) 『全集』第14巻、562頁。読みやすさを考え、句讀に多少の變更を加えた。

トグラフをあわせて一千枚ほどにもなったという<sup>17)</sup>。そして調査ノオトは十數冊にのぼった<sup>18)</sup>。

ヨーロッパに来て実際に敦煌遺書の調査に着手してみると、色々と思わぬ発見があり、これまで報告されたもの以外にまだまだ大きな可能性がありそうで、「英佛の敦煌古書はまだ未知數の寶庫であると云ふべきである」という確信を得た<sup>19)</sup>。したがってこれはどうしても網羅的にやってみたいという氣になったらしい<sup>20)</sup>。そこで「予は予等一行の目睹したところの目録を編纂し、これに羅振玉氏が既に印刷し、若くは寫眞を撮り、狩野、羽田兩博士、董康氏等の目録を請ひ得て予の目録と参照し、それを發表し、今後該古書の閱覽を欲する人のために手引きとする豫定で、目下編纂中で」<sup>21)</sup> あったが、結局これは完成せずに終わったようである。

しかし網羅的調査のための準備は渡航の前にも後にも着々進められていた。湖南は今回の旅行で上海を経由しているが、そこで行き歸りともに董康と面談している。彼らの話題の中心が敦煌遺書であったのは云うまでもない。日記に以下の記事が見える<sup>22)</sup>。

「(大正)十三年(1914)七月十日。朝上海に着す。…(中略)…東和洋行に投宿す。已にして董綏金を訪ふ。病を以て逢はず。一品香に赴き晚餐す。」

「(大正)十三年(1914)七月十一日。…(中略)…已にして歸宿し、更に出でて董綏金を訪ひ、歸りて晚餐し、夜九時過伏見丸に赴く。…(下略)…」

「(大正)十四年(1915)一月卅日。…(中略)…午後三時上海に入り、郵船埠頭につきしは四時なりき。林熊光氏、古田福三郎氏、大谷光瑞氏の使某氏等出迎へられしも、余は董康氏を訪て敦煌古書のことを打合すべき必要あるを以て、大谷氏には夜間面會を得れば御尋ね申すべき旨を使に答へ、林氏の自動車にて董氏を訪ふ。偶董氏外出中なりしも、留守人電話にて通じたる爲歸り來り面晤す。…(下略)…」

湖南はまたロンドンでの調査を終え、パリ滞在中の十月五日に、訪書の成果を次のように董康に報告している<sup>23)</sup>。

17) 「内藤先生の御持ち歸りになった寫眞口オトグラフは何枚あるか詳しくは知りませんが、千枚はあらうと思います。佛敎道教は極めて少數で其他の所謂四部に互っていますから注目すべき蒐集であらうとかと存じます。」石濱純太郎「敦煌石室の遺書」『東洋學の話』、72頁。

18) 『全集』第10卷の「あとがき」(内藤乾吉執筆)に「十數冊の敦煌古書調査ノート」の存在が言及されているが、未見。

19) 「歐州にて見たる東洋學資料」『目睹書譚』、297頁。

20) 歸途の船中での詩作に「石室紬書自馬班、溯洄流別二劉間、此生成就名山業、不厭重洋十往還」(歸舟中漫成六絶用神田邕盒送別詩韻第三首)とあるのは、よくその抱負を語るものといえよう。『全集』第14卷293頁。

21) 同上、298頁。

22) 『全集』第6卷「航歐日記」474-475、506頁。

23) 「與董綏金司農 甲子十月在巴黎作」、もと『航歐集』(私家版、1926年)に所収。のち『全集』第14卷の「湖



英博物館所藏石室遺書，除內典未染指外，已睹一百四十餘種，其尤奇者有群書治要斷簡二種、唐初法令、西涼建初戶籍之屬，又有珠英集（唐藝文志日本現在書目所錄），中存劉子玄詩數首，弟屬適爾士影照四十餘種，但有未允照者廿餘種。治要、法令、建初戶籍與閣下所錄摩尼讚文，並在未允之列，洵不知其何故，為之鬱悶累日。…（中略）…弟明日擬赴柏林，二禮拜後復還巴黎，涉獵伯氏所蒐燉煌遺書，留六禮拜，再還伊國，復由印度洋東歸。明春一二月間舟過滬上，重叩貴府，當以此游所獲奉覽，同其欣賞耳。

董康は「大正十一年（1922）から同十二年（1923）の間に英佛兩國に出かけて百數十部の敦煌古書を閲覽し、その中六十餘種を寫眞に撮つ」<sup>24)</sup> ていたから、その成果を是非自分のものと突き合わせてみなければならず、これは計畫中の目録編纂のためにも不可欠であった。そういったわけで行き歸りの面談において、互いに成果の交換をしようという話になったものに違いない。上掲の書簡でも湖南のほうから「當以此游所獲奉覽、同其欣賞」と申し出ている。歸途に上海で會ってから約二年ののち、董康が來日することとなった。董康は昭和二年（1927）正月元日午後二時に神戸に着き、当日の夜八時に京都に入ったが、その後まる四ヶ月日本に滞在し、五月一日上海に歸った。その期間、董康は湖南のもとに通って敦煌遺書の寫眞を借覽している<sup>25)</sup>。幸い『書舶庸譚』にこの時期の董康の日記が見えるので、いまそこから敦煌遺書に関わる部分を摘記して、董康自身に語らせようと思う<sup>26)</sup>。

（一月）二日。…（中略）…偕訪内藤湖南，湖南航歐，往復道經滬上，俱獲晤談。至是倒屣出迎，相別又一年矣。湖南復出燉煌遺書影片約二百餘種，中有余未寓目者，懇以每日借携回寓校錄，蒙其首肯，並贈余《華甲壽言》《航歐集》各一冊。航歐集中有致余一函，沈滯郵程，迄今未達，今補錄於後，以見余二人有同嗜矣。…（下略）…

（一月）三日。晴。小林邀午飧，並為攝影湖南送燉煌影片一包。

（一月）九日。…（中略）…閱燉煌影片內六朝本爾雅一卷，存釋天八釋地九，首尾殘缺，取與阮刻互校，除別體字及註語尾增加助辭從略外，可以是正刻本者，約卅四條，如…（下略）…

（一月）十日。晴。訪湖南還燉煌影片，並續借十五種。…（下略）…

---

南文存」卷十六に再録、その258頁。題注には「甲子十月」としか言っていないが、「明日擬赴柏林」とあることから、「日記」によって十月五日に書かれたことが分かる。しかしこの手紙は董康の手には届かなかったものと見え、董康はその著書『書舶庸譚』でその事實に觸れ、この書牘の全文を掲載している。後掲の『書舶庸譚』一月二日條の録文を参照。

24) 「歐州にて見たる東洋學資料」『目睹書譚』、292頁。

25) 『全集』第14卷「書簡」550（昭和二年一月十三日田中慶太郎宛）「數日前より董綬金入洛、時々敦煌影片の借讀に被參候。」

26) 『書舶庸譚』民國19年大東書局石印四卷本。

（一月）十七日。晴。湖南屬小林來言，伊今晚回故郷省親，約旬日方回，且傳語東京岡田及杉二博士於余之行蹤甚為繫念，並贈羽田亨博士與伯希和所出版之燉煌遺書影印及活字本各一冊。明妃曲已載入活字本，其中模糊之字，尚有審諦未盡者。…（下略）…

（二月）九日。…（中略）…午前十時訪文學博士羽田亨，博士曾游英法、亦嗜敦煌寫本，出示照片數種，余借其王梵志詩、韋莊秦女吟，以備手錄。…（下略）…

（四月）四日。…（中略）…覆校燉煌寫本新脩本草訖，欲持詣湖南掉換他種，聞因車程勞頓偃臥，不能晤客，遂止。…（下略）…

（四月）六日。…（中略）…偕小林訪湖南，借倫敦博物館燉煌影片兩匣。…（下略）…

（四月）十三日。…（中略）…余復訪内藤借得燉煌影片數種回。…（下略）…

文中に見える小林という人物は、京都で小林寫眞館を開いていた小林忠治郎である。コロタイプによる古書の複製を数多く手がけ、董康の最も親しい友人であった。ともあれ董康は湖南から敦煌遺書の寫眞を借覽するとともに、小林に依頼して複製を作っているほか、羽田亨からも寫眞を借りていることが分かる。また『書舶庸譚』の二月七日條には、董康が京都から東京に移動するに際して湖南に贈った「將去京都留贈湖南」詩が附載してある。

廿年杵臼愜心盟，契濶忻承倒屣迎，松徑橫琴陶靖節（座右置古琴一張），葩經傳譜鄭康成（藏毛詩正義為人間孤本），西征筆健供揮洒（西遊著航歐集），東壁星高富品評（東壁雙星為文章圖書經細之富當之無愧），石室相期俱不薄，奇文竚看壽瓊珩（同嗜敦煌遺書歸航各有所獲相約合梓行世）。

結尾二句の自注に「同嗜敦煌遺書、歸航各有所獲、相約合梓行世」とあるのを見ると、何か共同で書物を作る計畫さえあったことを推測させるが、詳細は不明である。いずれにせよ董康のほうは、わざわざ日本に來たことが十分に報われたと言ふべきであろう。では湖南のほうは董康の得た寫本を入手したのであるか。董康が英佛で目睹した書目について、湖南は「董康氏の閲覽書目は全部分明してある」<sup>27)</sup>と言ひ、すでに渡航前に入手していたらしいことを窺わせ、また董康が來日に際して攜帶してきたと覺しい筆録も借覽している<sup>28)</sup>。しかしこと資料については厭くことを知らない湖南であれば、筆録だけで満足するわけもない。來日した董康に寫眞を提供しているからには、湖南は當然それと交換に董康の寫眞を獲得していなければならない筈である。その董康の寫眞複製に関する資料が、偶々關西大學に所藏されているのを見いだしたので、ここにそれを紹介しておきたい。それは以下のような松浦嘉三郎の湖南宛書簡であ

27) 「歐州にて見たる東洋學資料」『目睹書譚』、296頁。

28) 『全集』第14卷「書簡」555（昭和二年三月神田喜一郎宛）「董君寫取の敦煌書三十種程借入、又その所藏九宮正始と申唐代詞譜ある寫本も借用閲覽中にて中々多事に之有之候。」

る<sup>29)</sup>。

拜啓過日ハ兩丹地方殊之外猛烈なる地震にて定めし貴地ニ於かせられても又お驚き遊ばされ候事と推察致居候。併し御動履益々御清佳の程只管祈り申し居り候。扱て一月中旬御依頼有之候處の董綬金宅所藏敦煌寫經玻璃版複製之件、ソノ後岩田寫眞師を督勵して複製ニ取掛り申候處、原板極めて不完全にして明瞭を缺く事も不尠、加へて該寫眞師中途にして流行性感冒ニ犯され存外ニ手間取り漸く二三日前に出來上がり申し候。合計百六十八枚、董氏分類を絲毫も紊さず、數枚宛別々の紙袋ニ入れ置き候間、御受取被下候。多分明日(月曜日故)鐵道便ニ相托し申候。芳澤公使ニも面晤の上御話置きしも、鐵道便ならば税金之掛かること万々なかるべしと存じ候間、小生より學術參考品として文學部に寄贈する形式を相取り申候。代金は一枚一元二十錢、稍高價之嫌有之候へども岩田君の小生宛之申入書ニあるが如く、存外手間取り且つ材料も高くかかり候由事情を聞けば、計二百元はまあ高からずと存候。岩田は人物技倆とも信用の出來る人なることは澤村專太郎先生も熟知の筈と存候。代價は別ニ急ぎ居らず候へども、直接同氏へ(北京東單牌樓西觀音寺三十六號岩田秀則氏)お支拂賜はらば結構と存候。併し小生も今月廿三四日北京を出發歸省先づ兩親の許ニ參り多分四月下旬頃京都に參り久振りで拜眉致し種々御教示ニ拜接致度存じ居候間、其節でも決して遅からじと存候。

右不取敢御挨拶の一書拜呈御機嫌お伺い申上げ候間勿々不一

嘉三郎頓首

三月廿一日

炳卿前輩大人

侍史

この書簡に據れば、湖南は松浦に依頼して董康所藏の敦煌遺書の寫眞168枚を複製した。代價は200元である。最初に言及されている北丹後地方の地震は、昭和二年(1927)三月七日午後六時二十七分三十九秒に發生した。したがってこの書簡の日付「三月廿一日」というのは昭和二年のことである。とすれば董康がなお日本滞在中の出來事である<sup>30)</sup>。湖南は自分の將來した寫眞を董康に提供すると同時に、董康からもその所藏寫眞の複製許可を得た上、すばやくそれを實行に移したのである。

松浦嘉三郎(1896-1945)は大阪の天王寺中學を卒業後、上海同文書院に學び(第14期生)、

29) 後掲圖版を参照。寫眞掲載を許可された關西大學當局に感謝したい。

30) したがって『書舶庸譚』にはこの地震のことも言及されている。曰く：「(三月)八日。晴。昨午後六時十八分山陰大地震。震源在竹島郡島津村，一村全滅。」發生時刻に多少の誤差があるのは、董康が新聞か何かの報道をそのまま記録したためであろう。



その後京都帝國大學文科大學史學科に選科生として入學、大正九年に支那史學專攻を卒業した。ちなみに湖南のために設けられたとされるこの專攻には前後六名の卒業生しかいない。松浦の一年下には神田喜一郎がいた<sup>31)</sup>。松浦は京大卒業後しばらくして北京に渡り、順天時報の記者となったが、昭和四年五月に退社して京都に歸り、新たに設置された東方文化學院京都研究所の研究員となった。おそらくは同研究所の評議員であった湖南の推輓によるものと推測される。湖南の依頼を受けて董康所藏敦煌寫本の撮影に奔走したのは、したがって松浦が順天時報記者であった頃であり、この書簡の封筒の裏に記された住所もまさしく「支那北京順天時報社」となっているのがそれを裏付けている。松浦は師のために奔走し、課税の煩を避けるためわざわざ學術參考品として京大文學部へ寄贈の形式をとった。この書簡にはそのために在北京日本公使館が発行した證明書も添付されている。撮影に当たった岩田秀則は王府井で寫眞館を經營し、在北京の日本人社會ではよく知られた人物であった<sup>32)</sup>。封筒内にはまた岩田の松浦宛請求書と「舌代」（價格についての言い譯が記される）が同封されている<sup>33)</sup>。

### 三、敦煌寫本の利用

ヨーロッパにおける敦煌寫本の調査はその後の湖南の學問に如何なる影響を及ぼしたであろうか。湖南は歸國早々、早速新しい材料を大學の演習に用いたらしく、上に觸れた石濱純太郎の講演には以下のようなくだりがある。

今年（大正十四年）の京都帝國大學文學部の講義の題目を見ますと、羽田教授は引き続き「中央亞細亞出土文獻解説」、内藤教授は新たに「敦煌古書の研究」と揃ってこの方面の講義演習がありますし、度々の學會の講演陳列に世は再び敦煌黨の手に戻ったかの様な勢であります<sup>34)</sup>。

31) 『京都大學文學部卒業生名簿1995年版』（京大以文會、1996年）によれば、支那史學の卒業生は、松浦、神田のほか、丹羽正義（大正6年卒）、内藤雋輔（大正10年卒）、小竹文夫（昭和3年卒）、藤田至善（昭和6年卒）の計6名である。

32) 岩田秀則の名は、むしろ河北省宣化で発見された日持上人の遺品を持ち歸ったことで知られ、それにもとづく前嶋信次の詳しい研究があるが、本文の主題とは関係がないので觸れない。ただこの遺品については当初から偽物であるという疑いもたれ、今日ではいよいよその説が有力になりつつある。

33) 請求書の文面は「請求證／一銀式百弗也／但シ特別形（9½吋x12吋）寫眞焼付／壹百六十八枚代（一枚ニ付壹弗式拾仙計式百壹弗六拾ノトコロ壹弗六拾ハオマケ）／右請求候也／昭和二年三月十七日／北京東單牌樓西觀音寺胡同／岩田秀則（印）／松浦様」、「舌代」のほうは「此寫眞焼付ハ特別形ニ付全紙より二枚シカ取レス（普通四枚切）ソレニ原板頗ル不良ノ爲各一枚ゴトニ原寸大ノ試験燒ヲ要スルナドオ料ト手數要スルコト甚シク從テ燒付料モ少ク高價ト相成リ誠ニ御氣ノ毒ニ存シマスカ右ノ次第故惡シカラス御思召下レ候／岩田生／松浦様」となっている。

34) 石濱純太郎「敦煌石室の遺書」『東洋學の話』5頁。

湖南一行が持ち帰った新資料によって、再び京都の學界に往年の敦煌熱がよみがえった様子を窺うことが出来る。もっともこれは湖南に同行した石濱の言辭であるから、多少は割り引いて考えるべきかも知れないが、さして大きな誇張はないであろう。この時期の湖南の大學における講義題目を調べてみると<sup>35)</sup>、大正十四年は「東洋史概説（近代）」「清朝史學」「燉煌古書の研究（演習）」、同十五年（昭和元年）は「支那の目錄學」「支那古代史料の研究（演習）」が内藤教授の擔當であり、昭和二年には内藤講師擔當として「支那中古の文化」が擧げられている。湖南は大正十五年（1926）八月三十日、停年により大學を辭しているが、停年後もしばらくは講義を繼續したらしい。もっとも昭和二年九月以降は本據を恭仁山莊に移したから、昭和二年の講義というのも前期に十回行われたただけであった<sup>36)</sup>。大正十四年の演習「燉煌古書の研究」は石濱のいうとおり、間違いなく敦煌寫本を扱ったものであり、大正十五年の演習「支那古代史料の研究」でも或いは敦煌寫本を取り上げた可能性はある。ただ具體的に如何なる文獻を講じたかは、残念ながらよく分からない。昭和二年の「支那中古の文化」講義は、著者の没後受講生のノオトに基づいて刊行されているが<sup>37)</sup>、中世が成立する六朝までで終わっていて、隋唐には及んでおらず、敦煌文獻に關説するところはない。もしこれが通年の講義であり、唐末まで講じられていたならば、必ずや敦煌文獻が引證され、湖南の敦煌學の一端が披歴された筈である。

次に湖南が書いたものの中にヨーロッパ渡航の影響を見よう。ただ最初に述べたとおり、湖南には敦煌文獻を對象としたモノグラフは存在しないので、我々は幾つかの論考に敦煌文獻が引かれているのを見るしかない。

『日本文化史研究』所収の「唐代の文化と天平文化」という一文はもと昭和三年三月に行われた大阪朝日會館における講演で、同年十月五日朝日新聞社發行の『天平の文化』に収録された。湖南自身もこの講演の最初に言及しているが、講演に先立つ二三年前に「唐朝文化と天平文化」と題する別の講演を行っており、こちらは大正十四年十二月刊行の『佛教美術』に掲載された。相隔たること三年であるが、その三年のあいだにはヨーロッパへの敦煌寫本調査行という湖南にとって大きな體驗が挟まっている。そしてこの歸國後の講演のほうには敦煌寫本への言及があるのが注意される。すなわち唐の官制につき觸れた箇所には次のように言う。

令は日本には幸ひに一部分殘闕してをりますけれども大部分が残ってをります。ところが唐の令は殆ど今日はなくなつてをります、全くなくなつてゐるといつてもよろしいのであ

35) 『史林』掲載の各年度「京都帝國大學文學部史學科本學年講義題目」に據った。

36) 『中國中古の文化』（東京、弘文堂書房、1947年；『全集』第10卷所収）への内藤乾吉の跋によれば、講義は四月二十日から六月二十九日までであった。

37) 上掲『中國中古の文化』。これも内藤乾吉の跋によれば、森鹿三、貝塚茂樹、安部健夫、田村實造のノオトが使用された。

ります、ところが幸に一部分を私がフランスで発見しましたので手づから寫して參りました。令のなかに公式令といふものがありまして、これが規定の文書に關する式を現はしたもので、つまり詔勅命令其他の文書の式であります、その部分が残つてあつたので寫して來ました。それは支那の敦煌から發掘したのでありますが、それをフランスの國民圖書館に藏してをります。それを私は寫眞に撮らうと思つたのでありますが、既に裏打ちをして肝心の令の方へ紙を貼つてあつた、その反對の面に紙を貼ればいゝのに令の方に貼つてあつた。それで仕方なしに一生懸命眺め透して寫しとりました…（下略）…

湖南は寫本番號に言及しないが、ここにいう公式令とはP.2819にあたる<sup>38)</sup>。さらに次のようにも言う。

それから格であります。格は散頒刑部格といふものがやはりフランスの圖書館にあるものを寫した。それはロトグラフで寫して來てをります。…（中略）…

式につきましては、日本では延喜式といふものがあります、唐式は敦煌から發掘されて支那の羅振玉氏が出版した水部式<sup>39)</sup>だけが残つ居つてその他はありません、これは河川とか水利に關するものであります。私がフランスに行くまでは、律令格式の中で水部式が敦煌から出たといふことは知れてをりましたが、他の律令や格はありませんでした。所が幸ひ私がフランスで調べた結果、令も格も皆出て來ましたのみならず、律の斷片もありましたが、これは今日世に傳わつてをる唐律と全く變りがありません。

散頒刑部格はペリオ編號P.3078、「律の斷片もありました」というのは同じくP.3608+P.3252（同一寫本が分かれたもの）。湖南の得意そうな顔が眼に浮かぶ。もっとも湖南自身はこれらの文獻について、さらに一歩を進めた研究を發表することはなく、他の學者の研究に委ねられた<sup>40)</sup>。

もうひとつの例を挙げよう。それは『研幾小録』所收「正倉院尊藏二舊鈔本に就きて」の以下のような附記である。

38) 表側になっていた文獻は今日唐人王績の『東臯子集』斷簡であることが分かっている。公式令など湖南將來の法制文獻三點については、辻正博「草創期の敦煌學と日本の唐代法制史研究」『草創期の敦煌學』156頁に言及がある。

39) 水部式はP.2507。羅振玉はペリオから提供された寫眞によって、京都滞在中に『鳴沙石室佚書』の一として、他の諸文獻とともに、これを複製した。民國二年（1913）九月、小林忠治郎の手によってコロタイプ印刷されたもので、宸翰樓本と呼ばれ、通行極めて稀である。『鳴沙石室佚書』はのち民國十七年になり東方學會から摸抄のうえ石印で刊行されたものが比較的流布している。

40) 前掲辻論文を参照。

近年敦煌出土本、世に出づるに及び、其中頗る多數の唐代書儀あることを發見したり、其の巴里國民圖書館所藏及びペリオ氏整理中の書は、近日其の目睹書録を發表する時期あるべきを以て、今此に載せず。東京文求堂田中氏も亦嘗て一敦煌本書儀を得たりしが、癸亥の震災に燬亡せしは惜むべし。

もとの論考は杜家立成（光明皇后御筆）と王勃集について書いたもので、大正十一年十月發行の『支那學』第三卷第一號に掲載された。附記はこの一文を昭和三年（1928）弘文堂刊行の『研幾小録』に収録する際に加えられたものである。やはりヨーロッパ渡航で發見した資料にもとづいて補足したものと考えられる。今日、書儀についての研究は日中ともに極めて盛んであるが、その存在と價值に言及したのは湖南のこの附記が最初である。

同じ『研幾小録』所収の「拉薩の唐蕃會盟碑」にも以下の附記が記されている。こちらのほうは昭和三年一月三十一日と附記を認めた日付が入っていて、やはり渡航後に付け加えたことがわかる。もとは大正七年四月十三日東大で開催された史學會における講演である。

此講演は時間の都合により、余が研究した唐代の字音に關することなどにも全く言ひ及ぼさなかつたのは遺憾であった。その後羽田博士が敦煌から出た漢蕃千字文の研究を發表されたに就て、此碑の字音が少々ながら重要な材料であることが注意さるべき者と思ふことを附加へて置く。

有名な漢蕃千字文は羽田亨の研究が『東洋學報』第十三卷第三號に發表され、その寫眞複製が大正十五年十二月に羽田・ペリオ共編になる『敦煌遺書』（影印本第一集）中に收められた。湖南自身の發見ではない。しかし湖南もおそらくフランスでペリオからこの貴重な寫本を示されたであろう。ヨーロッパ渡航のことがなければ、この附記もなかつたに違いない。

以上は湖南が敦煌寫本の調査を目的としてヨーロッパに渡航して歸國した後、講義、講演、著作などにその成果を用いたと思われる幾つかの事例であるが、それが意外なほど少ないことに驚かされる。もちろん詳しく探せば他にもこの調査行の反映と見られる事例が見いだせるかもしれないが、せいぜい一二を加えるに止まるであろう。しかし一方で渡航をきっかけとして湖南の敦煌熱が再燃したことも確かであり、その興奮と研究上の目に見える成果とのあいだの懸隔は一應氣になるところである。ある意味ではそこに湖南の敦煌學の特質が潜んでいるのかも知れない。

#### 四、結語：湖南の敦煌學

湖南はモノグラフを書くタイプの學者ではなかつた。歴史の大きな流れをとらえて、その本

質を指摘するのが湖南の學問の本領だとするのは一般的な理解であろう。大綱を捕捉するためには、しかし豊富な資料的裏付けがなければならない。湖南が文献資料の蒐集に多大の精力を注ぎ込んだのはその爲である。羽田亨は『支那學』の湖南追悼録に「史料蒐集家としての内藤博士」という一文を寄せ<sup>41)</sup>、湖南の史料蒐集に對する尋常一様でない熱心さを細かに描寫している。羽田は明治四十五年（1912）の奉天における調査<sup>42)</sup>に同行して以來、一貫して近くから湖南の資料蒐集を目の當りにしていた人物であり、湖南のこの側面を知悉していた。羽田は「朝鮮に行けば朝鮮の史料、西洋に行けば英・佛・獨に存する敦煌、西域の史料、さては太平天國關係の文書の採訪といふ風に、凡そ一旅行から歸られた時には、必ず貴重な史料が新たに將來されるのが常で」あったと書いているが、敦煌遺書探訪はまさしく湖南の資料蒐集活動の一環であり、その意味では湖南の敦煌學というものがあるとすれば、それは内藤湖南の史料學の一部として捉えられねばならないであろう。そして蒐集された史料はそのままの形で料理されるのではなく、然るべき時に最も有効なかたちで利用に供されるべく靜かに出番を待つことになる。ヨーロッパにおける調査後の湖南がひとまず目指したのが、當時考えられる最も完備した目録の作成であったのは、これらの材料の利用を容易にし、ひいては他の學者の研究上の便宜を圖るためであった。事實、湖南の將來した筆録や寫眞は多くの學者に提供され、研究の進展に大きく寄與した。自身の論著に訪書の成果が直ぐには表れなかったとしても、ある意味では當然といえよう。

また神田喜一郎は「内藤湖南先生と支那古文書學」において、支那古文書學の開拓者としての湖南の一面を説いている<sup>43)</sup>。それによれば湖南は大學における講義で早くから公文書に着目し、史書に見える漢代公文書であるとか、『元典章』であるとかを教材に使っていた。また神田は、湖南が傳世文獻のみならず、西域發見の古文書を収録したシャヴァンヌの書物や、それに據った『流沙墜簡』といった新出資料の書物までも参考書として教室に持ってきたことを紹介している。シャヴァンヌの書物は1913年の刊行で<sup>44)</sup>、『流沙墜簡』は翌1914年の刊行<sup>45)</sup>、スタインの第一回探險（1900-1901）の所獲品を掲載したものである。敦煌藏經洞から發見された遺書は、スタインが1907年に、ついでペリオが1908年に持ち歸ったもので、その分量と内容の多彩さにおいて卓越している。湖南がすでに早い時期に西域發見の遺物に含まれる古文書に着

41) 『支那學』第七卷第三號（昭和9年）526-532頁。

42) 湖南の奉天調査については、陶徳民「内藤湖南の奉天調査における學術と政治」『アジア文化交流研究』第1號を参照。

43) 神田喜一郎『敦煌學五十年』筑摩叢書版、131-136頁。神田は觸れていないが、湖南の古文書に對する強い關心は、古くからの友人である黑板勝美との交遊が多分に影響していると思われる。黑板は湖南より八歳年下であるが、日本古文書學を體系化したことで知られる。

44) Edouard Chavannes, *Les documents chinois découverts par Aurel Stein dans les sables du Turkestan Oriental*, Oxford: Imprimerie de l'Université, 1913.

45) 『流沙墜簡』三卷『考釋』三卷『補遺』一卷『補遺考釋』一卷、羅振玉輯、羅振玉・王國維同撰考釋、民國三年（1914）上虞羅氏宸翰樓景石印本。



目していたとすれば、敦煌寫本に多大の期待を寄せたのは當然と言えよう。そこには中國の古文書の現物が豊富に残っている違いはない。湖南の史料蒐集でもっとも重視されたのはこの種の一次史料の探索であった。

湖南が残した十數冊の敦煌古書調査ノートや將來した一千枚の寫眞をつぶさに見ていけば、湖南がそもそもどういった種類の敦煌遺書に注目したのかを知ることが出来るに違いないが、當面それが叶わないのはいかにも残念である。しかし湖南の「歐州にて見たる東洋學資料」には、自身の目睹した所に基づいて敦煌遺書の内容を比較的詳しく概観している箇所があり、そこから湖南のおおよその指向を知ることが不可能ではない。ただこの箇所は敦煌遺書の全貌を努めて客觀的に描寫しようとしたものであり、湖南自身の興味の所在を示すものでは必ずしもない。その意味でやはり調査ノートや寫眞の再發見と公開が俟たれる。

上にも見たように、湖南の生涯のうちで敦煌遺書にもっとも接近した山となる時期は前後二回である。一は明治末年のいわゆる「トンコイズム」華やかなりし頃であり、さらに二度目の山は歐州渡航をきっかけとして再燃した時期である。おそらくは色々な事情があったのであろうと思われるが、二つの山には約十五年におよぶ時間の懸隔がある。もし湖南が最初の時期から敦煌に専念し、狩野や羽田のようにヨーロッパでの調査を行っていたならば、様相はかなり異なったものになっていたに違いない。しかし大學における湖南の學問の重點はといえば清朝史やそれと関連する朝鮮滿蒙の歴史に置かれ、また一方では古典批判に基づく上古史であった。敦煌遺書に直接の関わりをもつ隋唐五代時期について觸れることは比較的少ない。みずからに與えられた職務を考え、意圖的に回避していたとも見られる。ヨーロッパで敦煌寫本を調査することは積年の念願であったはずであるが、停年を目前に控えた大正十三年になってようやく實行に移したというのも、慎重にその時期を窺っていたからであろう。滿を持して決行した調査の成果は、資料の點についていえば概ね期待通りのものがあり、寫眞や筆録など多くの貴重な材料を蒐集することができた。しかしこれらの材料をもちいて湖南が爲そうとした計畫は實現することはなかった。自然、内藤湖南の敦煌學というものも十分に形あるものとして提示し得ないのは何如ともしがたい。

抄本 呂のハ西丹地方殊々好種烈ふる地  
 粟々之安し 貴地ハ杉カサリ水々々  
 又お驚  
 き書有る水ハ不<sub>レ</sub>持<sub>レ</sub>去<sub>レ</sub>ぬ片<sub>レ</sub>併<sub>レ</sub>！ 御勤儀並々  
 漸<sub>レ</sub>情<sub>レ</sub>付<sub>レ</sub>程<sub>レ</sub>良<sub>レ</sub>管<sub>レ</sub>新<sub>レ</sub>今<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>候<sub>レ</sub> 扱<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>月  
 申<sub>レ</sub>白<sub>レ</sub>御<sub>レ</sub>依<sub>レ</sub>刺<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>心<sub>レ</sub>處<sub>レ</sub>の量<sub>レ</sub>緩<sub>レ</sub>全<sub>レ</sub>定<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>藏  
 燧<sub>レ</sub>燧<sub>レ</sub>寫<sub>レ</sub>經<sub>レ</sub>瑞<sub>レ</sub>瑞<sub>レ</sub>收<sub>レ</sub>禮<sub>レ</sub>製<sub>レ</sub>件<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>段<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>右  
 田<sub>レ</sub>寫<sub>レ</sub>真<sub>レ</sub>師<sub>レ</sub>五<sub>レ</sub>替<sub>レ</sub>今<sub>レ</sub>々々<sub>レ</sub>複製<sub>レ</sub>取<sub>レ</sub>扱<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>心<sub>レ</sub>處  
 原<sub>レ</sub>板<sub>レ</sub>極<sub>レ</sub>多<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>定<sub>レ</sub>全<sub>レ</sub>々々<sub>レ</sub>明<sub>レ</sub>瞭<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>缺<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>小  
 抄<sub>レ</sub>加<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>該<sub>レ</sub>寫<sub>レ</sub>真<sub>レ</sub>師<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>途<sub>レ</sub>々々<sub>レ</sub>流<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>性<sub>レ</sub>感  
 冒

松浦嘉三郎致内藤湖南信件（一）

關西大學所藏

之程亦存外、手間取、漸く二音前、出  
 来り申、心合計百六十八枚、甚々分類  
 正、録、毫も字、さが、數枚、宛、別、の、紙、代、取、在  
 軍、手、比、可、御、取、取、初、下、多、分、明、の、一、月、暇、有、致、鐵  
 道、便、相、持、申、其、得、便、之、而、便、之、部  
 活、會、事、も、鐵、道、便、亦、取、稅、金、掛、加、之、方、  
 亦、可、也、と、言、ひ、申、少、生、と、言、ひ、申、  
 文、學、子、申、と、寄、贈、申、形、式、互、相、取、申、  
 代、金、は、一、枚、一、元、二、十、兩、稍、高、價、に、據、り、三、心  
 一、心、山、本、屋、の、少、生、宛、申、之、書、之、亦、不、如、外

松浦嘉三郎致内藤湖南信件 (二)

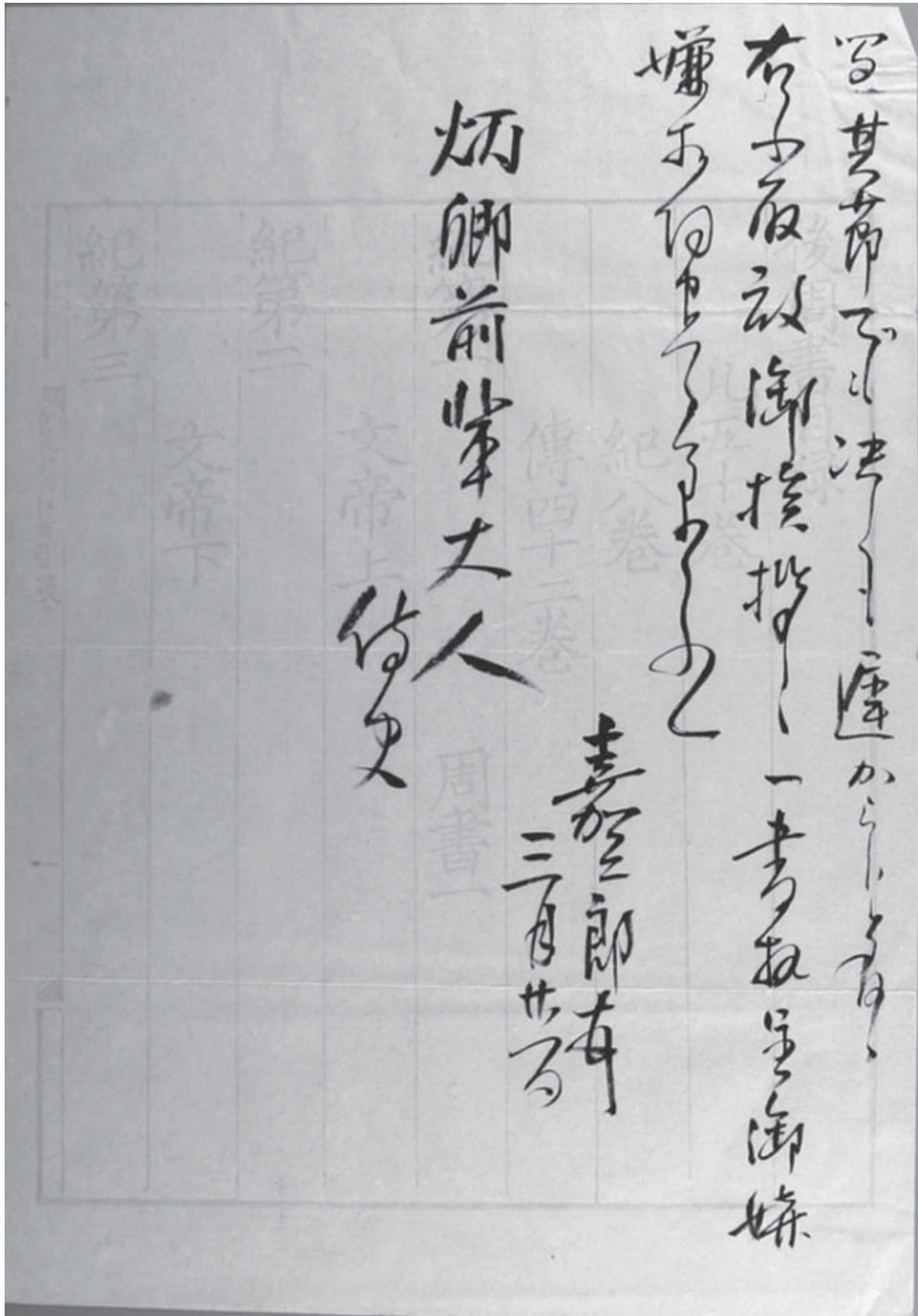
關西大學所藏



途にあり、且つ材料も高くかゝりし由事  
 情を聞けり。計二百元はまあ高からざる  
 岩の人物持柄も信用の出来る人おると  
 村専太郎先生も熟知する旨なる。代價の割  
 急き居る。いふは直接日女（北京東單  
 牌樓西觀音寺三十二號岩の妻別）とお  
 拂然りふ結構なる。併し少き。此月廿三  
 日北京と生女返歸者先づ西觀の許に冬  
 リ多分冒下句頃京都へ去り久振りで  
 お召し。種々御教示、直接返成る居不

松浦嘉三郎致内藤湖南信件（三）

關西大學所藏



松浦嘉三郎致内藤湖南信件 (四)

關西大學所藏